

闘
技
場(後編)

岡
本
俊
弥

(前編から続く)

3

その部屋は、広く明るかった。自然木の家具が並べられ、床には分厚な絨毯さえ敷かれていた。

低いテーブル、厚手の布で包まれた大きな椅子。私は、一つ一つの家具に手を触れてみる。

暗い茶の上敷き、机上には、数百年を経た、古い書物が、無造作に並べられている。

私は、一冊の本を手取る。見知らぬ文字をめくる。

その中に、一枚の二次元像がある。中世の、古めかしい部屋を写した印画だった。壁面に並ぶ棚、開いた扉、細々とした品物が、その奥に見えている。窓――遠い山野、窓辺で遊ぶ小動物、最後に、隣室から入ろうとする、人の姿がある。

*

私は、エスリトの事情徴収から始めることにした。ノエシスの言ったとおり、監禁されているわけではなかったが、敷地外への外出は許されていなかった。

「伍島と申します」

男はそう名乗った。若くはないが、筋肉質の体形をしていた。

「不便でしょう」

「まあそうですが、仕方ありません。待機するのには慣れていきますから」

「慣れているとは。この仕事をされる前は何を」

「わたしは元軍人なのです。仮現戦術部隊の操縦士をしていました」

「退役したのですか」

「ええ、あの部隊は通常の軍より、現役でいられる年齢がずっと短い」

そう言うと、伍島は苦笑いを浮かべた。

「しかし、そういう経験があるのなら、ここでの仕事には適任でしたね」

「……何をもって向き不向きと考えるかですが」

伍島はあいまいな返事をした。

あらためて、私は伍島の供述を聴いた。猜疑心を抱かれないよう、公安警察ではないこと、罪を問われるわけではなく、調書をまとめる上での単なる参考だと断っている。

「最初の二日間、わたしは模擬演習機が再生する〈塔〉の映像を確認しながら、駒の特性を把握するよう努めていました」

「〈塔〉、そんな駒がありましたっけ」

「〈塔〉は駒ではありません。観測装置なのです。監視塔とか、物見の塔とか呼ばれるようです」

「模擬演習なのだから、すべて計算で分かりそうなものですが」

「わたしは単なる操縦者です。仕組みに詳しくはありません」

「失礼、続けてください」

「そこでは、全域の中にある駒の分布が見られます。視点は、三次元俯瞰図に再構成され、広漠な盤のどこに駒があるのかが明瞭に分かります。実戦ではこういう形で見ることができません。視野が狭まるのです。〈塔〉の映像では何もかもが客観的に見られます。盤面の上を流れすぎる〈蜂〉の群れ。のろのろと首を延ばす〈蝸牛〉、岩場を縫う〈蜈蚣〉。〈蜘蛛〉に率いられた陣営の駒たちが、観客のような立場で把握できません。最初の遭遇がどこになるかは、賽子なのか疑似乱数なのか、ともかく確率的に決まります」

「二日間で駒の特性は理解できましたか」

「わたしが軍で担当していたどの機械とも違うものでした。たしかに仮想的な操縦装置で兵器を操るといふ点では同じです。しかし、設計が理解できませんでした。わたしが経験した兵器の形状には合理的な根拠、意味があります。相手が人間のこともあ

る。それでも戦う形をしている。ただ、このものは何かこう、変な、おかしい感じがして」

伍島は言葉を濁す。

「任務を行うのに支障を感じましたか」

「いや……そんなことはありません」

「続けてください」

「三日目、わたしはようやく約定に参加します。組織的な支援がないのが、違和感の要因だと思います。近代的な戦闘で集団を介さないものはありえません。素人の喧嘩とは違いますから。ところが、ここには支援がないのです。どこから何が襲ってくるのか、教えてくれる計器すらない。すべて自分で判断しないとイケない。開始時点で、二つの陣営の駒はきわめて近接した位置に置かれます。索敵の手間を省いているのかもしれませんが、いきなり敵と戦うわけです」

領域の中は、細分化された仮想区画にさらに分けられる。仮想区画内に許されるのは、一つ以下の駒である。敵の領域に入ると、お互い相手を倒すまで闘いが続く。区

画外に及ぶ攻撃力は、どの駒も持たない。

どちらかの駒が、相手の占める区画に侵入しなければ、闘争状態は生じない。

視野の狭い〈蝸牛〉や〈蜈蚣〉たちは、最初に与えられた指令に従い、ただ前進する。そのままでは機械的な一対一の戦いとなるが、勝てる確率は五分になる。操縦者が伍島になると状況が変わる。駒の特性に応じた弱点が突けるからだ。装甲の厚い〈蝸牛〉には〈蜈蚣〉との連携動作が有効に働く。二つの駒を高速で切り替えながら、一体をできるだけ早く破壊する。

「最初から状況は悪かったのです」

敵陣営に近接した〈蜂〉が、高度に制御された敵の〈蜂〉を補足する。

「お互い百の駒を持っていると、どれを操縦者が直接操っているのかが見極めにくい。早期に敵の技量を知ることができれば、幸運だと思いました。しかし、思った以上に相手の力量は上だった」

数分間の近接戦のあと、〈蜂〉は撃墜される。

「〈蜂〉の場合、一方的な負けはない。どちらも行動不能になって壊れるからです。た

だ、どうなったのか分からない、きわめて短時間で決着したので、わたしの目論見は達成できませんでした」

〈蜂〉は次々と射落され、すぐに戦略的な目を失うことになった。全体の状況が見えなくなったのだ。伍島は自陣の駒を隣り合う砂漠に退避させようとする。視界を遮る草原では、何が起こっているのか把握が困難だからだ。

「草原から離脱する前に、味方の駒には大きな損害が生じていました。狙われていたのです。もつと早期に退避すべきでした。短い時間でこちらの布陣を見切り、目を潰し、動きが定まらない駒を個別に撃破されたわけです」

ようやく脱出した砂漠の走行は〈蝸牛〉には不利だった。移動速度が低下する。砂漠といっても起伏に富んでいる。だが、追手の姿は見えなかった。

「小康状態となりました。砂漠を移動する間に体勢を立て直し、速度は落ちましたが密集体形を保つようにしました。やがて岩場が見えてきました」

岩場の視界は草原に次いで悪い。しかし守りを固めるには向いている。

「何か罠を張っているのかもしれない、と思いましたが。黙って反撃を許すとは考えら

れないからです」

手駒は半数に減っていた。

文字通りの目の届く範囲、岩場の頂点に配した〈蜈蚣〉だけが眼だ。防御の中心に〈蜘蛛〉を置いているが、何れにしてもこのままでは勝ち目がない。約定には、時間切れによる引き分け規約などないのだ。どこかの時点で攻める必要がある。

異物の侵入は、そんな時に起こる。

〈塔〉が記録した俯瞰像には、何も捕えられていない。しかし、分解能を上げると、岩場に埋もれた異物が明瞭に浮かび上がる。はじめ、それは黒ずんだ岩塊の一部である。一つ一つの像を分解すると、岩はやがて、金属の残骸のように見えてくる。

灰色の金属板が見分けられる。少しづつ食い違った形で、幾重にも積み上げられた金属。金属板、粗い切断面、正確な直方体、上に行くほど厚みの薄くなる三角形の板。でたらめに、整然と、ある法則の下……すべてが矛盾をはらんでいる、無秩序に並べられた板。

そこに〈蜘蛛〉が現れる。

伍島との面談を終え、私は部屋を出た。

窓からは時間を追って変化する風景が映っていたが、不思議と時間が経った感覚がなかった。

気がつくくと、陽が落ちて何時間かが過ぎていた。

人影のまばらなホーを抜け、食堂に向かう。職員用の施設は閑散としていた。

照明をおとした天井に夜空が広がっている。そこから、暗い砂漠を写す壁面まで、全面が継ぎ目のない窓に見えた。

机の上を照らす小さな明かりを頼りに、私は席につく。

「いかがでした」

顔を上げると、すぐ前にノエシスがいる。

「まだ、半分だけなのでね」

「相手がいる、というわけですね」

「対戦相手について、何か追加事項は」

「お渡しした資料以上のことは何も」

当然のことながら、約定には二人のアスリートが必要になる。対戦をして決着をつけるのが約定なのだ。

だが、もう一方の対戦者はいない。

約定終了直後に亡くなったと聞いている。病歴調査では分からない、突発的な心筋梗塞によるものだ。珍しい事故だが、不可抗力ではある。しかし、関係者の半分の証言だけでは不十分だった。

ノエシスの言う資料とは、伍島と会う際に提示された個人情報である。

伍島については、本人が述べた通り元軍人だ。機構統合軍第一方面仮現戦術部隊に所属していた。

「相手は匪賊や反徒ですよ、武器はお粗末だった。ユロー軍から略奪した兵器が主力ですが、ああいった兵器は保守部品が入手できない。製造元が消滅しています。われ

われの攻撃機の敵ではありませんでした」

などと、仕事内容を説明してくれた。

無人機を操縦し、遠隔地から敵を殺す仕事だったわけだ。

もともと日系人は正規軍にはあまりいない。仮現部隊はそうでもないかもしれないが、かつてパッシユミデシユ側、ユーロやアメリカに加担した関係で、信用されていないのだ。

もう一人は純粹な民間人だった。

契約時点では無職。仮現技術は規制が厳しく、民間ではほとんど使われていないのだから、経験はないと思われる。だとすると、約定の操縦者になぜ民間人が選ばれるのか。

選定理由など、肝心の情報は記載がない。

しかも、この男も日系人なのだ。確かに、今回の約定対象は東アジアと関係がない。

だが、同じ出身地域では偏りが生じるのではないか。

幾島という名前が書かれている。伍島とよく似た風貌をしていた。

「幾島とは会ったのですか」

「操縦者の選定は、われわれ執行部門が行うものではありません。操縦に必要な反射神経と、特殊環境における耐性を基準にして指名されるのです。約定の駒は軍事技術の兵器とは全く異なります。軍人だから民間人だからといって、経験的な差異はないのです」

「軍人だった伍島はともかく、正体不明の民間人を採用してこういう結果を招いたとすると……」

「機構が指名したのに、正体不明はないでしょう。そういう感覚的な意見には賛同できません」

「ふん」

黙り込むしかなかった。

その前に、私は上司と打ち合わせをした。最初に告げられた目的は、不正の摘発だった。

「工作を疑っているというのですか」

「そうだ」

上司は固い声でいう。私と上司は窓辺に立ち、眼下を見下ろしていた。計画的に建てられた新市街の官庁街だが、道路の中央には人工の川が流れている。

「なぜ、そういう疑いが」

「機密事項だが、今回の約定では、イタリ半島南半分の権益が裁定されることになっていた。ユーロと北アフリコとの係争案件だ。通常の些末な事項とは比べものにならない、大きな政治的影響がある」

「そんなものまで対象になるのですね」

「武力で争うと、ユーロは不利になる。他に手がないわけだ」

「工作があるとすると」

「疑いはユーロ側にある。どちらに有利かがだが、ユーロ側からすると少なくとも約定で勝てなければ、すべてを失うことになる。もし勝てば取引材料になる。奴らからすれば、勝つ以外に方法がない」

「すると、ユーロの勝ちだったのですか」

「いや、そこが問題なのだが、工作は失敗したと思われる。決着が付かなかったからだ。不正の証拠を掴んで、違反による判定負けを下す必要がある」

「不正ならば重罪ですね」

「地域全体が懲罰を負うことになる」

「そんな危険を冒してまで、不正が行われるのでしょうか」

「価値があるかどうかは、立場が違えば変わるだろう」

監査部の見解は、あくまでもユーロ側不正とするものだった。機構政府部内ユーロを擁護する空気はほとんどない。不公平かもしれないが、そういう予断を抱いていた。

その、ユーロ側の操縦者が幾島だった。

「外部要因だというのですか」

「そう思います」

照明が、磨かれた机に照り返した。ノエシスの表情は、本気とも戯れとも思えた。雑談に近い会話の中だった。

「私見だと」

「証拠がありませんからね」

「侵入できるような経路があるのですか」

「約定のプラーリは、閉鎖環境下にあります。外部に対して完全に閉鎖されていない。駒を初期化する際に外部と接続されますし、自律的であるが独立ではない。そこに侵入を許す余地がある」

「一般論のように聞こえますね。可能性ではなく証拠が必要だ」

「何十年と運用されてきたプラーリに、あのような瑕疵が生じるとは考えにくいのです。約定は、固定的ではありません。創設以来、つねに改良を続けてきた。そこに含まれないとするなら、外部要因を考えるのが妥当でしょう」

「不正が行われた疑いについては、ノエシスも同じ意見なのかと思っていた。だが、確証はないようだった。」

「何かを隠しているのではないか。私は疑いを深めた。」

約定は、死に至る遊戯だ。

駒は必ず死ぬ。

私は、伍島の協力を得て、実際に何があったのかを駒の視線で確認してみることにした。投射、あるいは、埋め込みと呼ばれる作業は、駒の記録との同期によってなされる。

ここでの感覚は、視知覚だった。もとより駒に五感などない。

視野角や感知できる光の帯域は、人と同じではないが、一望するだけなら厳密さは必要ない。

〈蜂〉。空、雲、山々、岩場、また岩場。明るい空、暗い大地、草の海、風紋を描く砂丘……小さな駒、のろのろと動く〈蝸牛〉、その隣点の〈蜈蚣〉、また〈蜈蚣〉、動く、速い動き。遠い山々、一瞬の反射光、駒、一つ、一つ二つ。流れ去る平面、静止、岩。荒い、影の散らばる岩場。顔を覗かせたばかりの陽。雲、東の彼方の低い雲。

赤みを帯びた光線。〈蜘蛛〉。流動する風景、駒、駒の集団。隣接点、埋め尽くす〈蝸牛〉、〈蜈蚣〉。衝撃、光の爆裂。煙り、回る回る、空、岩場、空。そして、凍り付く風景。

最後の瞬間は、遙か下方で、首をもたげる、〈蝸牛〉の像である。

〈蜂〉の飛ぶのは、さほど高くない空だ。風の影響をよく受ける。

この時点では、まだ異物の姿はない。ちょうど、〈蝸牛〉のいた辺りなのだった。

駒の破壊は小さな死といえる。

接続を断ち視覚を閉じても、回復されない機能、失われた部分が残る。

「なんだか厭な感じがする」

操縦士は完全破壊まで待つことなく、次へと憑依するというのが、それでもどこかに死を意識する。何というか淡い、ぼやけた死の瞬間だ。

「慣れていないからでしょう。仮現技術というのは、にせものの現実なんですけど、わたしを担当していた無人機のように現実存在するものもある。誰かを殺せば本当に死ぬとなると、確かに後味が良くないでしょう。ただ、これは違う。純粹な仮想その

ものじゃないですか」

「ただ、約定の結果は現実に影響を及ぼすわけでしょう。だから嫌な感じがするのかもしれない」

第二の〈蜂〉。真上の陽。まばらな駒、岩場、駒、動かない駒。遠い境界。間近な岩、岩、駒、駒。〈蝸牛〉、〈蜈蚣〉、〈蜘蛛〉。静止。流れる風景。

それは、二つの駒のようだった。最初の一つは、大きな岩を抱えるように登る、〈蝸牛〉である。首を前方に延ばし、辺りをうかがいながら、静かに越えていく。

もう一つが異物だった。そのはず、というべきだろうか。ぼやけた陽炎で、明瞭な像を結ばない。一瞬、〈蝸牛〉、〈蜈蚣〉、〈蜘蛛〉と認識を変え、その後は、岩の一部に紛れてしまう。

初期の視覚再現に異物の影はない。あるとき突然に、それが出現したと推測できた。

〈蝸牛〉。しだいに、大地が迫り上げられていく。岩の頂から、辺りを見る。変わらない。荒い岩膚、遠景は広がる光の環だった。左に傾ぐ体型を、平衡に保ち、岩の間へと降りる。目は、間断なく走査している。どこにも、何も見えない。〈蝸牛〉も〈蜈

蛭も気配は遠い。今は何も無い。岩、岩の間を登り、下る。すぐ手前から、下り斜面がはじまっている。その傾斜に沿って、窪地へと回り込む。残骸がある。何の形骸なのか、散乱した金属だった。きらきらと光るもの。光暉の中、遠い景観と重なって、何かがある。それは、〈蝸牛〉でも、〈蜈蚣〉でも、〈蜂〉でもない。視野を閉ざす光輝だった。

「その瞬間、何が起こったのか分かりましたか」

「いや、分からないうちに視野が閉ざされ、駒にいつさい触れなくなりました。約定自体が終了していたわけです」

「執行側からの説明はありましたか」

「もともと終了したら、それで仕事は終わりだといわれていましたからね。納得できませんでしたが、しょうがないでしょう。正常終了ではなく、問題が起こったとは薄々感じました」

長い動乱期、亜欧戦争が終わってから半世紀が経過した。

世界は破滅の寸前まで追い詰められたが、滅びはしなかった。もともと亜欧の力の差は歴然だった。戦争の痕跡は、特にユーロの地域にそのままの形で残されている。汚染を除去するだけの技術や資金が不足しているからだ。

だが、エイジアにも戦時の爪痕はある。北東エイジアの日本は、大幅な人口減を伴う荒廃から回復していない。私も伍島も日系ではあるが、幸いにも祖父の代に島外へ逃れることができた。生まれ育ったのは大陸だ。島を見たこともない。日本が故郷とはいえないのだ。

ところが、幾島は違う。

残された経歴書をたどると、東京に生まれたあとの職歴が記載されていた。さまざままな非正規雇用先を転々としている。具体的な勤務先、組織名が書かれていない。何年から何年といった当たり前の要件が省かれている。軍務が中心の伍島の経歴書とは全く違っている。

まだ、朝が早い。ようやく昇ったばかりの陽が、歪んだ全形を見せている。

雲一つない青く澄んだ空だ。食堂に人影は疎らだった。遠くに一人、二人と、何かを話し合っている。声は聞こえてこない。

もう一度、昨日を思い出す。

〈監視塔〉は、どんな侵入者も発見できなかった。しかし、嚴重に封鎖されたはずの領域に、何かが入り込んだことも明らかでなかった。

約定の開始、仮現内時間で一時間後、二時間後、必要ならば、数分ごとの像が得られた。一〇時間、一五時間、二〇時間……。駒は総て追跡できる。

しかし、異物はない。

同一地点には岩場だけがあり、他と変わりがなかった。

陽光、あるいは漆黒に近い闇の中でも、同じ岩を写していた。

異物など、どこにも存在しない。

空の〈蜂〉、地上には〈蝸牛〉が見える。〈蝸牛〉は、岩を登り、窪地に降り、やがて、その区画から抜け出していく。

何事も起こらない。

夕刻、〈蜘蛛〉が接近する。

小高い丘の頂、短時間の静止。それは、不自然な体形だった。〈蜘蛛〉は確かに何かを見たのだ。低地へと向かう。残骸のそばを慎重に通る。〈蝸牛〉の動作とは、若干食い違う。真っ直ぐにあの地点へと進んでいる。

と、溶けた焼け残りだけがあった。一瞬の終幕だった。〈蜘蛛〉が丘に達した瞬間だ。

〈蜘蛛〉を熔融し、約定を混乱に陥れた最期だ。

「仕様ではないとしても、物理計算上は成立する、そうおっしゃるのですね」

面談の席で、ノエシスはこう答えた。

「約定空間は現実と同じ物理法則で動いています。投げられたものは計算通りの軌道で飛びますし、揚力を失ったものは重力に従って落下する。この場合は、規定外の熱が発生した結果、駒を構成する金属の融点を越え、融解が起こったのです。物理計算上は間違っていない」

「しかし、熱源がない」

「動力源は電池が用いられています。電池の破損で熱が発生することはあります」

「電池が発火したとしても、金属を溶かすことはないでしょう」

「それは……そうです」

「物理的に律速された世界だから、物理的に可能な現象は何でも可能だ。しかし金属を溶かすような装置も、もちろん駒もない。仕様外の動作が生じたのでは」

「過去に事例のない状況です」

「過去にないからといって、起こらないとは限らないでしょう」

「可能性だけの議論は無益です。外部要因としか思えません」

押し問答の繰り返しだ。

その日遅くに、私は上司と会議を行った。

「外部からの侵入との一点張りですね」

「証拠がないだろう」

「ええ、約定プラーリに何らかの欠陥があると思われませんが、こちらでも証拠はない」

「どちらにしても、プラーリ自体を解析する権限や能力は我々にはない。大事になり

すぎる」

「もう一人の操縦者も気になりますね。伍島との面談で分かった限りでは、相手が相当の熟達者と思えるのに、経歴には全く表れていない」

「そちらは調査している。日本の地域政府に照会している」
待つしかないのか、私は嘆息する。

7

違和感を覚えた。

経過は順調だった。様子見のつもりだった序盤で、敵の未熟さが見えたため、急遽攻撃を強めたのだ。敵アスリートは、個々の操作はそこそこできて、駒の連携が全くとできていない。配置を大雑把に捉えると、一挙に駒を進めた。敵は混乱し、体制を整えるまもなく後退した。

ここまでは予想外の勝利だった。

だが、追撃を始めようとしたとき、幾島はシステム側のレスポンスに違和感を覚えたのだ。

何かある。

これまでも、ゲームシステムの裏をかくのが得意だった。裏というか、要するにバグだ。たいていのバグは、テスト漏れや、システム自体のマージン不足に隠れている。ふつうなら使わない組み合わせや、負荷の増大で初めて現れる。通常のオペレーションでは気が付かないだろう。

汎用のゲームの場合、バグの存在はすぐに知られることになり、何らかの対策が打たれる。解析の専門家も多い。それまでの時間勝負だ。

不正まがいの行為は、システム側にも非があるので表立って批判はされないが、幾島が嫌われる理由にはなった。

チート野郎、というわけだ。

この約定の場合、システムはクローズだ。ごく限られたユーザしかいないとなると、バグが隠れたまま長い間眠っていても不思議ではない。

勝つためなら、何だって利用してやる。

幾島はユーザ・プロセスの権限を上げて、何が使えるようになるのか試してみた。一度プロテクトを外してしまうと、さまざまパラメータが弄れるようになる。用途の分からないものが多かったが、いくつかは有用そうだった。

決めるのは直感だ。後先考えるのは、終わってからでいいだろう。

陽が沈み、夜半を経てまた昇る。時がたつにつれ、戦いは疎らに駒の動きも領域全体に広がる。

解析を優先している間に、約定の半分は終わっている。敵は岩場に要塞を築いていた。数の上では優勢でも、このままでは攻め倦むだろう。

影と光……色彩のない、白と黒の岩場。

幾島は自陣の〈蝸牛〉を引きずるように持ち上げ、狭い空隙を抜け、小高い丘の頂に静止させた。

そのとき、パラメータを変更する。

規定外の存在が現出する。

空間創造のの要となる、光線追跡の物理法則が捻じ曲げられないのだ。その方向には、空白がある。光学ステルスではない。視野にぽっかりと穴が空いている……何もない。

敵の〈蜘蛛〉が駒の残骸を横に見ながら、空白に接近する。向こうからこちらは視認できないのだ。でたらめな何かにしが見えないだろう。

さらに、パラメータを変更する。

陽光に照らされた岩の温度が急激に上昇する。熱を一切反射しなくなったのだ。さらに熱線を吸収する。

爆発は、次の瞬間だった。

光は、視覚の限界を越え、なおも輝きを増大させる。

時間が、急速に拡張される。数万分の一秒が、数時間ほどの広がりを見せる。彼方に〈蜘蛛〉の死が覆い被さっていく。

「一致度の高い人物が同定された」

私は何度目かの会議をしていた。

「それはありがたいですね」

「経歴はまったく一致しない、という以前に、人物が一致すること自体が問題だと考えられる」

「よく分かりませんが」

「我々が見つけた幾島は故人なのだ」

「いや、もともと……」

「戦前に死んでいる」

私は当惑する。

「どういう……」

「この約定直後に死んだ操縦者と同一人物であるはずがない、ということだ」

「人物が詐称されていた、と」

「厳密に言うとは戦前に死んだ幾島も、約定の操縦者だった」

「分かり難い話ですね。約定は戦後に始まったものではないのですか」

「機構以前の約定は、限定的な運用がなされていた。人物を裁くものだったが、ある戦争犯罪を裁く際に、大きな不正が行われて中止になった。そのときの操縦者が幾島だった」

事件の内容を上司は簡単に説明した。

エイジアの戦争犯罪人が逮捕され、裁かれることになった。内戦状態にあった国内で、市民殺傷の責任を問われたのだ。内戦の当事者は、政府とユーロが支援する反政府組織だった。告発したのは、当時ユーロにあった警察機構だ。政府側は、他国内政に干渉したユーロにも責があると主張した。決着には、約定による判定が適用された。

「その約定で不正行為があったと認定されたのだが、内容が今回と酷似している。関係者だったので、古い幾島の記録は残っていた」

「しかし、戦前と今とは同じプラーリではないでしょう」

「約定は戦時中使われていない。長い空白がある。戦後に復活させたのだが、中身はほとんど同じだ。多少計算性能が上がったにせよ、大きな違いはないだろう」

「欠陥がそのままとは」

「かつての当事者はもういないからな」

「すると、今回はそれを知った誰かが、同じ欠陥を突いた」

「そういうことだ」

「動機はあるのでしょうか」

「初めに話した通り、ユーロ側にはある。機構に内通者がいて、意図的に工作したと考えられる。最後は失敗したようだが、これでユーロ側の不正と断定できるだろう」

「戦前最後の約定は、どう決着したのですか」

「決着などしなかった。不正を契機に小さな紛争が積み重なり、大きな動乱を呼び起こした。約定の有益性など、あっさり捨てられた。もっとも、その頃の約定はユーロや大国側に有利となっていたからこそ実施できていたのだがな。その後、長い亜欧戦争がはじまり、世界秩序が大変動した。きみも歴史で習ったとおりだ」

部屋にあった本を聞いてみる。

一枚の印画だった。

中世の部屋の生活を、一瞬捕えた二次元像である。棚——さまざまな品物が、無雑作に置かれた棚。壁に開かれた窓と、部屋に入ろうとする一人の男。

「あれは、十五世紀の木象嵌です。寄せ木細工で作られた、書斎を象った絵でね。棚も、窓も、品物も、みんな木で作られている。そう、絵に見える騙し絵なんです。本物に見える絵、絵に見える寄せ木、当時の流行だったのでしょうか」

解説する男の声がある。

扉を開く。把手を握って押し開く。古風な扉だった。

部屋は、間接照明が灯されたただけだ。掛け布に手をやり、ゆっくりと引いてみる。とたんに、朝の光が部屋に満ちた。

暗い茶色の羽目板に、朝陽がきらめいた。窓にむかう机、昨日から開かれたままの本を、棚に戻す。

一枚の硝子、遠い砂漠の光景。外を覗く。灼熱の砂漠。

扉を開け、廊下に出る。廊下を曲がった、向こうが妙に明るかった。光——陽の光が漏れている。

角を曲がる。

まぶしい。沈む西日が、全面に照りつける。光に幻惑された眼は、視界を一瞬失う。

夕暮れの残光に照らされた岩場だった。

足を、八本の足を上げる。交互に繰り出し、岩のはざまへと歩み出す。

陽が沈む。

ここはどこだ。

何かが見えた。とほうもない高さの塔。いや、遠近法の錯覚だ。それは、窪地の斜面に立つ、あまり大きくはない複雑な機械だった。

約定領域なのか。

異物がはつきり見える。

窪地へと、一步を踏み出す。ゆっくり、静かに。

異物は、円筒上の物体として現実にあった。軸から何本もの枝が張り出し、きらきら光る実を付けている。

一步一步、足場を確かめながら接近する。

細部は、驚くほど明瞭だった。枝々に付着する金色の糸が、実と実を結んでいる様子。赤い透明な実と、深い青の枝。胴部からは、淡緑色の光が下の斜面を照らしている。機械という印象は急速に薄れていく。

さらに接近する。

実の色が、赤から紫に変わる。実は、鉱石の結晶に見えた。封入された物があるようだった。辺りの薄暗さが増すと共に、異物の光輝は強まっていく。原色が夕闇に映える。

急に、総ての色が消える。

枝々の実が、花を開く。花卉が一斉にこちらを向く。反射光が差す。花卉は、鏡な

のだった。

岩場に立っている。

手を陽にかざす。

斜面がすぐ下から始まり、日陰に異物があつた。絡み合つた、三本の円筒だった。滲み出るような光、それぞれが白、淡黄、鮮緑の色を放っている。突起のない、滑らかな表面だった。

近づくにつれ、三本の柱は、ますます振くれながら、螺旋を描き上へと延びて見える。

岩に足をとられ、膝をつく。手を伸ばし立ち上がると、また一步その複合物へと進む。周囲は、もう影の中に沈んでいる。淡い円筒の光は、こちらを照らすほどではない。

どれぐらいの高さがあるのだろう。

窺ううちにそれはどこまでも延び、威圧感を与える。簡単な目測さえ、得られない。

空は、急速に明度を失っていく。

全体の角度が変わって見える。目の前へ、いまずぐにも倒れかかる塔——三つの色が、頭上から、蛍光に変わり降りかかる。

包み込まれていくようだ。

傾斜を静かに登っていく。空は、視野から消えた。白光、それが瑠璃に浅黄色に移り変わる。

急に岩がなくなる。

白い円筒が、垂直に立っていた。もう、光を滲ませている。右横に黄色い円筒、後方に緑の円筒が、円周を三等分する形で置かれている。

薄明の微光が、付近を満たす。円筒以外、平面を占めるものはなにもなかった。透き通る空気——しかし、まるで紗を掛けられたように、重要なものがぼかされている。

円筒の下面から、それほどの明るさはなかったが、光が洩れ出している。すぐそばまで歩く。

扉がある。そっと押し開いた。

そこは、古い部屋だった。

椅子に人が坐っている。

「誰だ」

「ここはあなたの領分だろう」

幾島だった。椅子に深々と座り、足を投げ出している。

「こんなものを隠して生きてきたとはね。経歴を詐称したのはおれじゃない。あなただ。あなたは日系には違いないが、ヨーロッパの奴らの文化で育った。戦争中なら排斥されただろうが、幸いにも戦後はアジア系が優遇される。そこに目を付けられて、ゲリラに洗脳されたわけだ。子どもを洗脳するのは簡単だからな」

「……」

「あなたは、必要な時に目が醒めて工作を行うスパイ、スリーパーになった」

私は言葉を探す。

「何が、必要な時だ」

「この約定と混じり合った風景が何か、思い出せないのか。これはイタリアのウルビーノにあったストウディオオーロだ。イタリアの帰属問題がキーになって、植え付けられ

た衝動が有効化された。半島を守るためにな。だが、おれを使ったのは間違いだった。すべて失われることになる」

「そんな、覚えはない」

「隠蔽された記憶は表面には出てこない。表にあるのは、偽の意識だけだ。それだから作業員なんだろう。無意識で行動する。おれは記録に基づいて再現されたハックツールに過ぎない。憶えちゃいないだろうけど、忍び込ませたのはあんただぜ。何の知能も持たないが、話したり昔のアスリートの操縦を模倣するくらいなら楽々実行できる。もちろん約定違反だ。だがよ、おれはそういうふうには作られたものだからな」

そこで、私はユローで最後に住んだ、イタリ中央にある村の記憶を蘇らせる。

丘の上に古い建物が残っていた。宮殿の跡もあったが、中は荒れ果てており、何も見るべきものはなかった。

だが、いまこの壁の一端には仕切りの入った棚があった。格子扉が半ば開かれ、無数の箱や本が見えた。

棚から、一冊の本を手取る。革張りの重い本だった。頁を繰ってみる。見知らぬ

言葉で埋められていた。背の文字を確かめ棚に戻す。

横の扉の奥に、砂時計がある。戸を一杯に開き、時計を引き出す。最後の砂が、ちようど落ち切るところだった。

もう一方の壁には、窓があった。庭の先に灌木状の森が続き、低い山々が見渡せる。動くもの、小さな動物が窓辺に顔を見せ、こちらを向いたかと思うとさっと姿を消す。

動物の隠れていた籠が、窓の縁に置かれている。籠の果実を取る。

赤く熟した林檎だった。